

事業活動実績報告書

施設名	幼保連携型認定こども園葛飾みどり
教育理念	自ら生きる とともに育ちあう

事業の区分 (5領域)	健康 ・ 人間関係 ・ 環境 ・ 言葉 ・ 表現
1 事業名	オンリー碗(陶芸作品)を作ろう
2 実施期間	令和 6年 4月 1日 ～ 令和 7年 3月31日

3 取組概要	(取組日) 令和 6年 4月 10日 ～ 令和 6年 4月 19日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 子どもたちが自分自身のオンリー碗を作る際、どのような気持ちを持ち、どのような姿が想像できるのか？保育者自身が陶芸と関わることで、工程や土の感触などを体験する。 
	(取組日) 令和 6年 4月 30日 ～ 令和 6年 5月 1日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 作る作品を決める前に、まずは子どもたちと既製品のお皿や湯飲み、手作りのお皿や湯飲みを触って見比べてみる。作りたい作品を話し合っ、決め、それに使用する陶芸の土をグラムで分け、準備する。 ・丸く丸めて保存することで、作成過程で割れにくくなる ・随時水をつけながら行う＝乾燥を防ぐため 子どもたちと一緒に土を叩いて、丸くしていきます  
	(取組日) 令和 6年 5月 9日 ～ 令和 6年 6月28日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること こどもたちと一緒に陶芸土をたたいてお皿のようにしていく。『冷たい』や『固い』など、感想を言いながらそれぞれのペースで叩いていく。陶芸の土から、園庭の土まであそびが発展し、園庭の土で丸めたり、お団子やさんなどに発展していった。 
	(取組日) 令和 6年 10月 10日 ～ 令和6年 11月 25日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 陶芸土で作った作品。乾燥するのを待つ。ひびが入ってしまい、綿棒に水を付けてひび割れを修復した。芋ほりなど、自然の土と触れる機会があり、芋ほりを終えた子どもたちが、土を握って感触を楽しんでいた。素焼きを行い、本焼きするために『釉薬』を付ける。子どもたちの遊びのタイミングを見て、釉薬付けは一人一人と行い、釉薬の意味を伝えつつ、仕上げていった。 

3 取組概要	(取組日) 令和 7年 1月 20日 ~ 令和 7年 2月 28日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 釉薬は『ガラス』になるため、焼く際に板にくっついてしまう。余分な釉薬を取り除き、本焼きを行う。完成したら、自分自身で作った作品を用いて、会食会を行った。お皿を大切に、食べ物も残さず食していた。自分で作ったからだと感じる。	
	(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
	(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
	(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
	(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの

効果検証報告書

施設名	幼保連携型認定こども園葛飾みどり		
教育理念	自ら生きる とともに育ちあう		
事業の区分(5領域)	健康 ・ 人間関係 ・ 環境 ・ 言葉 ・ 表現		
1 事業名	オンリー腕(陶芸作品)を作ろう		
2 事業概要	陶芸とは、土を形成して高温で焼き、陶磁器などを作る技術のこと。テーマに沿って、自分の考えや自分の個性を表現する。		
計画時	3 実施体制	取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況 年度初めに陶芸についての園内研修を行っている。陶芸を熟知している職員が、保育者に『陶芸とは?』という基礎から、作品の応用まで研修を行い、保育で陶芸を行う前にまずは職員が実際に作る機会を設ける。	
	事業後 3についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 年度初めに陶芸についての園内研修を行ったことで、保育者自ら子どもたちと陶芸作品を作ることに意欲的になった。作品の応用まで研修を行ったため、子どもたちにもどんな作品があるかを共有できたため、子どもたちと一緒に相談しながら作品を決めることが出来た。	
計画時	4 事業のねらい	◎陶芸作りには『きまり』は無い、というところから、想像力を働かせ、いちから自分の感性で土を形成して完成させる。 ◎冷たい土に触れることで、楽しい気持ちになったり、心が落ち着いたりして、陶芸土の独特な感触を味わう。 ◎完成した作品はオンリーワンとなり、自分の作品に対して愛着を持ち、物を大切にする土台を築く。	
	事業後 4についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 過去に作った作品や既製の物を見たり使用して見たりして、想像力を働かせた。それによって、『作った作品をどうしたいか?』というところまで子どもの発想が進み、完成後の進級祝いのおやつを乗せていただいた。完成した作品はオンリーワンとなり、自分の作品に対して愛着を持つことが出来た。(給食のお皿を割れないように大切に持つ、など生活にもつながって行った)	
	5 取組の内容	計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等 ・まずは職員が園内研修で陶芸体験をして、工程や土の気持ちよさを自ら体験する。 ・各学年で年3回陶芸体験をする為に日程を立て、計画する。 ・どのような陶芸作品にするのか?子どもの興味や関心から選ぶ。 ・自分の身体の一部で、お皿やお碗が出来る面白さ(膝碗・頭碗・こぶし碗など) ・園庭に落ちている派の葉脈を模様につけてお皿を作ったりして、作品をより身近に感じられるようにする。 ◎準備 ・土を300グラム程度を空気抜きをして球体(割れを防ぐ)にしておく。 ・作る際に丸い皿状になるまでたたく。・作品が出来たら、よく乾燥させ、900度で素焼き。 ・釉薬でおのおの思い描いた模様を付けたりして、本焼き。自分で思い描いたものを実際に作品にしていき、想像力を発揮する。 ・身近なもので作品を作ることで、愛着をもって作品と関わる。 ・自分だけの作品を完成させ、物を大切にする気持ちが芽生える。	
	事業後 5についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 ・自分の身体の一部で、お皿やお碗が出来る面白さ(膝碗・頭碗・こぶし碗など)を知った。作品の模様を園庭で見つけた葉っぱなどで付けたことで作品をより身近に感じ、完成したものを大切にする姿があった。 ・土を300グラム程度を空気抜きをして球体(割れを防ぐ)にしておいた為、おわんの丸みを作るのにはスムーズだった。 ・身近なもので作品を作ることで、愛着をもって作品と関わることができ、子どもたちのアイデアで、実際に何かを入れて会食したいという気持ちに発展し実現することが出来た。 ・自分だけの作品を作った体験から、物を大切にする気持ちが育ったと感じる。	

計画時	6 環境構成	◎完成作品を室内に飾り、園児自ら興味関心が持てるようにする。 ◎普段使っている給食のお皿に注目できるように、保育で取り上げていく。 ◎陶芸を形成しやすいように、板、水、雑巾の用意。 ◎土にも興味を持てるよう、陶芸の前に様々な種類の土を触って、感触を知る。 ◎陶芸を作る事だけが『作品』ではない。自分で作った作品を、自分の手で窯に入れ、焼き上がったら窯をあけ、出来たばかりの作品を見るため、安全を見ながら陶芸室に入る。
	事業後 6についての 効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 完成作品を室内に飾り、園児自ら興味関心が持てるようにしたため、自分で模様付けのアイデアもだすことに発展した。そのことからより『自分だけの』お椀という気持ちで完成品を愛おしく扱っていた。普段使っている給食のお皿に注目できるように、保育で取り上げていったことで、家庭の中でも既製品のお皿に興味を持って、家事の手伝いをする姿があったと保護者からも報告をいただいた。
	7 期待される効果 児童の姿	取組を通じて期待される児童の姿や効果等 ◎陶芸作りには『きまり』は無い、というところから、想像力を働かせ、いちから自分の感性で土を形成して完成させる。→伸び伸びと物事に関わろうとする。今後、いろんな場面で自分なりに表現しようとする。 ◎冷たい土に触れることで、楽しい気持ちになったり、心が落ち着いたりして、陶芸土の独特な感触を味わう。→土を通して、感性を豊かにし、楽しい、嬉しい、きもちいい、などの自分自身の思いに気が付いていく ◎完成した作品はオンリーワンとなり、自分の作品に対して愛着を持ち、物を大切にする土台を築く。→作られているものには、全てに『過程』があり、過程を思うからこそ、その物に対して『大事にしよう』『壊れないようにしよう』など、物を大切にするここの本質を理解する
	事業後 7についての 効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 陶芸に伸び伸びと関わったことで、いろんな場面で自分なりに表現しようとする姿があった。陶芸土の独特な感触を味わったため、これまで感触に対して過敏だった子も、園庭の土や砂と関わる姿が見られた。土を通して、楽しい、嬉しい、きもちいい、などの自分自身の思いに気が付き、陶芸以外での子どもの姿が生き生きと変化した。作られているものには、全てに『過程』があるということを学び、その物に対して『大事にしよう』『壊れないようにしよう』など、物を大切にするここの本質を理解することが出来たと感じる。
	8 効果検証 総括	事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて 完成作品を室内に飾り、園児自ら興味関心が持てるようにしたため、自分で模様付けのアイデアもだすことに発展した。そのことからより『自分だけの』お椀という気持ちで完成品を愛おしく扱っていた。普段使っている給食のお皿に注目できるように、保育で取り上げていったことで、家庭の中でも既製品のお皿に興味を持って、家事の手伝いをする姿があったと保護者からも報告をいただいた。陶芸土の感触を味わったためか、これまで感触に対して過敏だった子も、園庭の土や砂と関わる姿が見られた。土を通して、楽しい、嬉しい、きもちいい、などの自分自身の思いに気が付き、陶芸以外での子どもの姿が生き生きと変化した。作られているものには、全てに『過程』があるということを学び、その物に対して『大事にしよう』『壊れないようにしよう』など、物を大切にするここの本質を理解することが出来たと感じる。